

女性の悲劇としての *Great Expectations*

崎 村 耕 二

(人文学部人文学科英文教室)

Abstract: Although Charles Dickens's *Great Expectations* has Pip as its hero, trying to rise in the world as a gentleman, it is possible to read the book as a novel of women. Miss Havisham, Mrs Joe, Estella, Molly can be categorized in the group of women who place themselves in a situation where they find their opposite sex something to revenge, to bully, to scorn, or to be jealous of. They are designed to meet their tragic destiny in crushing themselves or being crushed by someone representing the masculine power. There are, on the other hand, the other group of women who are happily to finish up in marriage: Miss Skiffins, Clara, Biddy. The paper seeks to show the pathetic way in which the former group of women are brought into a situation where they ought to be defeated by the male sex in contrast to the steady but easy way in which the latter group meet a happy ending. In the novel Charles Dickens presents himself not as an anti-feminist; on the contrary, he shows sympathy with women who fall into an unfortunate relationship with men.

主人公ピップの少年期から青年期への成長を中心に展開する *Great Expectations* は、一見したところ男性の物語に見える。登場人物の中には鍛冶屋のジョー (Joe Gargery), 流刑囚マグウィッチ (Magwitch), 法律家ジャガース (Jaggers) など印象深い男性たちがおり、それぞれが大きな役目をはたす。しかし何と言っても、この作品は、ディケンズ (Charles Dickens) の長編小説群において *David Copperfield* とともに、男性の語り手が回想するという点で際立っている。すべてはピップ (Pip) という男性の目を通して描かれるのである。当然ながら、この作品を、ピップという男性の視点に沿って読むのが多くの批評家たちの従来やり方であった。¹ “Expectations” とは、「遺産相続の見込み」であるとともに、紳士としての立身への「期待」そして、エステラという美女獲得の「期待」であった。ここにはあくまで男性の価値観がはたらいっている。しかし、そのような特徴にもかかわらず、この作品は女性の物語として読むことができる。本稿では、この作品に登場する主だった女性のうちに二つのパターンを見ることによって、女性の悲劇としての *Great Expectations* を考察してみたい。

女性登場人物たちに見られる大きな二つのパターンを、二つの象徴的な言葉で端的に表わしてみよう。一つは、〈つぶれる〉形であり、もう一つは〈あがる〉形である。まず〈つぶれる〉形から説明してみよう。*Great Expectations* に登場する女性たちのうち、ハヴィッシュム (Miss Havisham), ジョー夫人 (Mrs Joe Gargery), エステラ (Estella), モリー (Molly) の四人を一様に特徴づけるのは、彼女達の強烈な情念である。彼女たちが持つ、復讐、癡癪、侮蔑、嫉妬という否定的な情念は、本質的には男性に向けられたものである。そしてその枠組みはすべて恋愛や結婚 (あるいは果たされなかった結婚) の形を取った男女の関係である。これらの女性登場人物たちがたどる道は、まず、不幸の直接・間接の原因である男性への戦いである。しかし、彼女たちがはまり込む図式は、男性に対する怨念のために男女の理想的な関係を拒否することであり、これは彼女たちにとって不

幸な結果を生む。自ら〈つぶれる〉、または男性から〈つぶされる〉のである。もう一つの〈あがる〉形とは、双六の比喩であり、一定の手続きを経た上で、男性との和合が成就し、結婚つまり男女の理想的な関係が成立して終わるということである。これは、〈つぶれる〉形とは対照を成すものであり、同時にそれを引き立てている。以上二つの図式を、個々の登場人物について見てみよう。

〈つぶれる〉形の代表は、裕福な酒造業者の娘であったハヴィシャムである。彼女は婚約者（実は詐欺師）のコンペyson (Compeyson) に、巨額の資産を奪われたあげく裏切られ、その絶望から半狂女となる。彼女は全男性に対する復讐を誓い、養女エステラを使うことによって、ピップを初め、多くの男性を侮辱する。しかし、最終的にこの老婆は、エステラからそっぽを向かれ、復讐の唯一の手段を失って、ショックを受けるのである。この老婆は、やがて、もはや取り返しのつかない人生を悔やんで、悲惨な死をむかえる。ここに見られるパターンは、ある個別の男性から受けた屈辱→男性全体への復讐→自己破滅という図式で表わされる。ディケンズは、幸福の絶頂を象徴する結婚式が、当日になって取り消される、という悲劇的狀況を設定することによって、永遠に成就されない結婚つまり女性の最大の不幸を描いたのである。この悲劇は次の点によって、さらに深められる。つまり、その原因となる事件の衝撃は極めて人間のかつ悲劇的であるとはいえ、ハヴィシャムは、男性との絶対的な敵対関係を自ら作り上げることによって、幸福な女性像への道を、完全に閉ざしてしまうのである。Satis Houseの化け物じみた有り様は彼女自身が作り出したものである。しかしながら、女性の理想像は、結婚（つまり男性との望ましい和合の関係）によってのみ成就されるという理念が、ヴィクトリア朝の道徳的女性像を特徴づけているとすれば²、全男性を敵にまわしたハヴィシャムは必ず処罰されなければならないのである。つまり、悔悟の兆しをわずかに見せるものの、救われないままに不幸な最後を迎えるのである。こうして、先に示したような屈辱→復讐→破滅という図式が成立する。

この図式を心にとめて、次にジョー夫人を見てみよう。彼女は、ピップとジョーという二人の男性に対する圧制者として描かれており、読者の度肝を抜くような女性像である。ピップの帰りが遅いといっちは荒れ狂い、夫の態度が気に入らなければ、飛びかかって髭をつかみ、壁に彼の頭をぶつけたりする。善良で家庭的なジョーは読者の目には理想的な夫と映るのであるが、ジョー夫人にとってはそうではない。全く甲斐性のない夫であり、彼女にしてみれば、いつもあたり散らさずにはいられないのである。ジョーに象徴される肉体的強さ（男性的特徴）を、痼癩によって圧倒しているという意識—それが、彼女の痼癩をさらに助長する。George Gissingはジョー夫人のマゾヒスト的な傾向を暗示するような分析を行っているが³、ここではむしろ、彼女は痼癩によって、男性への挑戦を行っていると考えたい。ディケンズの意図したところは男性が女性に一方的に求めている愛らしい家庭の主婦の像を、ジョー夫人によって目茶目茶にこわしているのである。もう一点、注目すべきことがある。彼女は自分の事を“a slave with her apron never off”と呼び、主婦業の苦労を呪っているという点である。毎日の主婦業に追われる彼女の姿は、ピンや針をいっぱい指したエプロンによって強調される。しかも、彼女にとって、ピップは、「奴隷のような」苦労を象徴しているのである。両親が早く死んだために、姉である彼女が弟の面倒をみななければならない。そのことからくる、主婦業の重みは、ピップに対する嫌悪を真っ先にかきたてるのである—“she had wished me in my grave, but I had contumaciously refused to go there” (24)。ここに見られるのは、実の弟ピップに対するジョー夫人の残酷なまでの悪意であるが、この悪意は、主婦業への呪詛のために増幅されていると考えなければ理解しがたい。しかしながら、同時に、夫の善意をふみにじり、主婦業の重荷である弟を呪うという妻の行き方は、男性との協合という大きな枠組に対する侮蔑にもとづいている。当然、ジョー夫人の女性としての歪んだ在り方は打ちつぶされることになる。オーリックの恨みをかかって、背後から殴り倒され、再起不能となったあげく死んでしまうので

ある。事件の発端となった口論の場面（第十五章）で注意したいのは、ジョー夫人の癩癩が、オーリックだけでなく、ジョーにも向けられるということである（“To hear the names he's giving me! That Orlick! In my own house! Me, a married woman! With my husband standing by! O! O!” 107）。彼女はやがてヒステリーが頂点に達して気絶してしまうのであるが、語り手のユーモアまじりの但し書きによると、彼女が気絶したのは、格闘でジョーがオーリックを打ち倒したのを見届けた後である（108）。これは次のことを語っている。つまり、ジョーは妻の悪辣な行為には腕力で反抗しないのに、他人から妻へ向けられた同様の行為には腕力を行使するというを、ジョー夫人ははっきり確認したのである。彼女は、癩癩という強力な唯一の武器によって、ジョーとならびオーリックをも支配下にいれるのである。しかし、この事件によって新しい枠組みが現われる。女性対男性という枠組みである。これは、次の二点によって物語のなかに暗示される。第一に、格闘の直後、ジョーとオーリックは、先ほどの騒ぎなど嘘だったように仲よく部屋の掃除をしたり、和気あいあいと、ビールを酌み交わす（108）という事実である。ここで、読者の意識のなかではどうしても打ち消す事のできない疑問つまり、ジョーを打ち倒したのは、ジョーの反面としてのオーリックではないのかという疑問がわくのである。善良であるために、男らしさの属性である腕力を奮えないジョーをオーリックは代行しているのである。もう一点は、ジョーが襲撃された直後、ピップは、自分がこの傷害事件に一枚加わっているという嫌疑をかけられるのではないかと不安になる点である（113）。表面にははっきり出ないが、ピップには女性に対する抑圧された屈辱感が刻み込まれており、男性（男らしさの属性としての腕力）と女性（途方もない女性の情念）の対抗関係のなかで見た場合、ピップはオーリックの側にいることが読者の意識にほめかされるのである⁴。このように男性対女性という枠組みで見てくれば、ジョーの場合、次のような図式が成り立つ。夫の善良さ→それにつけこんだ癩癩→男性（夫によって代表される）に君臨→男性（オーリックによって代表される）の暴力的側面によって<つぶされる>。

次にエステラを見てみよう。彼女は先に考察したハヴィシャムの養女として、男性への復讐の道具にされるのであるから、当然、二人には重なる面がある。実際、ハヴィシャムは、Satis Houseにとどまってピップがこの高慢な美少女に振り回されるのを見て楽しんでいるだけなのに対し、エステラは直接ピップに精神的打撃を与える。例えば、彼女はトランプ勝負の後、カードの呼び方がおかしい、手がざらざらしていると言ってはピップを侮蔑する（55）。また、パンと肉をピップに持ってきた時の態度は、まるで犬にでもあてがうような態度であり、ピップの心を深く傷つける（57）。彼女は暴力さえ奮う（“she slapped my face with such force as she had” 76）。後に彼女がフランスでの教育を終えて帰国した時には、ピップはすでに、謎の人物からの財産を受けて紳士の仲間入りをしており、以前のような仕打ちをすることはない。しかし、社交界において、他の多くの男性に対し、屈辱的なあしらいをすることによって、ハヴィシャムの意志を継承しているのである。しかしながら、物語の半ばを過ぎて（第38章）、一つの事件が起こる。養母と養女の間で口論が交わされ、二人の間に決定的な亀裂が生まれるのである。ハヴィシャムは、彼女を拒むような態度をエステラの中に察知し、機嫌をそこなう。しかし、エステラには、当然“Who taught me to be proud? ... Who taught me to be hard?”（291）と抗弁する当然の理由がある。ここでは、女性として成長したエステラが自分の生い立ちの不幸を自覚していることがはっきり示される。たしかに、エステラの不幸は、男性（悪党コンペysonに代表される男性全般）との敵対関係に否応無く組み込まれた宿命にある。しかし、ここでエステラが取るべき行動は、この自覚をステップにして、この呪われた関係から解放されることである。彼女も認めているとおり（“I make a great difference between you [Pip] and all other people” 344）、ピップは、彼女にとって鍵となる存在なのであるから、この時点でピップと結婚することこそ幸福な道であろう。しかし、エステラはそうしないの

である。後に彼女は、ピップの懸念を弄ぶかのように、ピップが最も嫌悪するあのドラムルとの結婚の意志を明らかにする (344)。ハヴィシヤムの意志にさえ反して (345)、エステラは結婚を決意するわけである。しかも双方に幸福をもたらさないということを知りながら。ということは、彼女の前半生を決定したハヴィシヤムの狂氣的な生き方に、今度は自分の選択と意志によって、仕上げをすることになる。エステラの向かう方向はハヴィシヤムと同様であり、あくまで男性を敵対者として見ることで、女性としての幸福を自暴自棄に投げ捨てている⁵。彼女は、当然ながら愚劣で傲慢なドラムルから、悪逆な仕打ちを受ける (このことは、ただほのめかされるだけである。368-369, 458) こうして、もともと、男性との敵対関係に無理に組み込まれた被害者であった彼女は、あくまでこの関係の中にとどまることを選び、〈つぶされる〉ことになる。

モリーという人物は、この作品のなかでは、背景的に描かれており、対男性の関係でみれば、これまで述べてきたパターンとは明確に重なりはしないが、押さえ込まれた女性という意味で興味深い。彼女は、途方もない嫉妬という情念を持つ (“this woman ... was a perfect fury in point of jealousy” 372)。彼女がマグウィッチをめぐって恋敵を殺したのも、嫉妬心のためであった。しかし、ウェミック (Wemmick) の言葉によると彼女は “A wild beast tamed” (190) であり、訴訟で殺人罪から救ってくれたジャガースの所へ駆け込んだあとは、彼のいいなりになって家政婦として働くのである (モリーはこの点で、家事に縛られる女性としてのジョー夫人の姿と重なる。) しかし、大釜の熱気によって歪められたマクベスの魔女たちの顔が、彼女の顔と重なるという恐ろしい連想にピップがおそわれたように (201)、彼女の激しい本性は久しく潜在しているのである。しかし、彼女の “the old wild violent nature” (392) がわずかでもその兆しを見せると、ジャガースは、圧倒的な心理的威圧によって彼女を押さえ込むのである。ジャガースの言葉によると、この女の手ほどの力を持つ者は、男の中にもめったにいない (203)。しかし、法廷中を震え上がらせるほどの絶大な弁論能力をもつジャガース (191) は、男性としての肉体的威力を行使することはない。彼は、法律家としての揺るぎない経歴と途方もない威圧感によって、この激しい情念と腕力の持ち主を圧倒的に従属させるのである。ジョーが決して成しえなかった、女性の激しい気性に対するコントロールが、ジャガースという男性によって成されるのである。この物語の中では、このようにして女性の激しい情念は否定される—ジョー夫人のそれが男性の暴力によって否定され、ハヴィシヤムのそれが悔悟とその後の自滅によって否定されたように。

以上考察したように、四人の女性の在り方は皆、それぞれに悲劇的であるが、そこには一つのパターンがあることがわかった。彼女たちの悲愴な結末についてさらに考察する前に、彼女達とは全く対照的な三人の女性登場人物について検討してみよう。スキフィンズ (Miss Skiffins)、クレアラ (Clara)、そしてビディ (Bidly) である。スキフィンズは、二重人格的な世界に生きるウェミックの、平和な家庭的領域に登場する。冷徹な法律事務の世界を離れてひとたび彼の “Castle” へ赴くやいなや、父親思いで陽気な好人物に豹変するこのウェミックが、どのような女性を求めているか、読者の目には歴然としている。つまり、ウェミックがかたくなに守り通そうとしている家庭の幸福を、最終的に仕上げるための結婚—その結婚の対象としての女性なのである。彼女は (ピップの推測によれば) ウェミックと同様に “portable property” を所有しているらしい (280)。“portable property” の大切さをしばしば口にするウェミックが抱く中流階級の価値観から見れば、これはこの女性の物質的な堅実さを語るものである。年寄りのことも非常に大事にする (280)。彼女は “Castle” をよく訪れ、甲斐甲斐しくお茶の支度をしたり (282)、飲み物をウェミックと同じグラスから飲んだりして (284)、ほとんどウェミック家の一員のような立場にあるのだが、あくまで客として居るのだということをおぼろげにわきまえている。(彼女が訪問中、緑の手袋をはめたままであるのは、“an outward and visible sign that there was company” であるという興味深い説明がある

[281]。お茶の後始末が終わるとまたはめるというのも面白い [283]。) また、横に座ったウェミックの手が次第に彼女の腰の回りをまわって行くと、彼女は落ち着き払ってその手をほだき、テーブルの上に置く。ピップはそのテーブルを“the path of virtue”と呼ぶ (284)。こうして、結婚へ至る道は、美德に導かれながら堅実に行われる。ある日、散歩と称して教会へ赴き、スキフィンズを見ると、“Halloa! ... Here's Miss Skiffins! Let's have a wedding” (430) と叫ぶウェミックの洒脱には、執着のない着実さがある。スキフィンズはウェミックとともに、この着実さを共有しているのであり、情熱の兆しささえ見せない二人がたどり着く平穏堅実な結婚は、情念の嵐で男性たちを吹き荒らすようなハヴィンシャムやジョー夫人の様な女性たちの不幸とは対照をなす。双六の駒のように、スキフィンズは〈あがる〉のであり、それ以上でもそれ以下でもない。この小説中でピップのかなり重要な脇役をつとめるウェミックの立場から見れば、彼女の登場回数は二回と少なく、彼の結婚相手という最終目標に向かってまっしぐらに進み、やがて〈あがって〉、終わりなのである。ハーバート (Herbert Pocket) のガール・フレンドであるクレアラ (Clara) はどうであろう。うだつの上がない良家の子息ハーバートに付き合う娘として登場するのであるが、あくまで添い遂げて結婚するのである。彼女が属する女性のパターンを特徴づける道徳的堅実さがここにもみられる。まず第一に、彼女が初めピップのことをハーバートの悪友 (“an expensive company on who did Herbert no good” 352) と誤解するのは、恋人の堅実な将来を思う気持ちからきている。次に、厄介な父親にあくまで孝行しようという態度がある (“The dear little thing ... holds dutifully to her father as long as he lasts.” 427)。しかし二人の障害として最後まで残ったこの父親が死ぬと、難無く結婚することになり、小説の終末におけるハーバートの経済的自立を結婚で飾ることになる。以上、スキフィンズとクレアラに見たパターンでは、脇役としての女性登場人物が男性登場人物に添い遂げ、彼らの自己実現の画龍点睛となっていた。物語の終末で結婚が行われて、それで女性は成就—〈あがり〉—である。この二人の場合は、相手の男性との〈共あがり〉ともいえるのであるが、ビディにおいては、異なる形をとっている。ピップも考えたように、エステラとの出会いと財産相続がなければ、ビディはピップの当然の結婚相手である (“I might even have grown up to keep company with you [Biddy]” 121)。エステラを知った後、“common”, “coarse” と呼ばれる人々から身を離そうとするピップの立場からは、ビディも侮蔑の対象である。しかし彼女は、多くの点でディケンズの理想の女性像を表していると考えられる。ピップの方から再び降りて来て、善良で慮深い女性としてのビディを再認識する期を待たなければ結婚はありえない。五十八章の終わりでピップが吐露するように、すべての望みが断たれた後、なすべきことはビディとの結婚である。ところが、ピップが本当にビディを求めた時に、彼女が占めていた場所は、ジョーの伴侶としての席である。ここにおいて、ウェミック—スキフィンズ、ハーバート—クレアラとならんで、ジョー—ビディの結婚が、この小説の結末を彩る唯一の幸福な要素となる。しかし物語全体を眺めてみて、一体、ジョーとビディの二人がお互いを求めあったことがあったかという疑問が起こる。ジョー夫人の葬式の後、“I am not going to leave poor Joe alone” (269) と言ったピップの言葉に何も答えず、ピップの怒りをかうビディの心には、ピップの高慢に対する非難の気持ちとともに、ジョーへの思いが暗示されていると考えられる。しかし、ジョーのそばにたたくビディには、男性の幸福を支える助手としての女性像しか浮かび上がって来ないのである⁶。結末におけるビディの結婚を考えた場合、ジョーが様々な来歴をへてビディへたどり着いたというよりもむしろ、ジョーのかたわらに空席ができ、そこにビディが〈あがり〉を果たしたと見る方が適切である。

以上、*Great Expectations* の女性登場人物たちを、二つのパターンから分類して考察したわけであるが、二種類の女性たちの本質的特徴を単純化すればそれぞれ、男性に対する破壊的な情念と、男性奉仕のための家庭的理知という言葉で表わせる。第二のグループに属する三人の女性の前には男

性と分かち合う結婚の幸福がある。彼女たちが表わす女性像から遠く離れた第一の女性の末路は不幸である⁷。ヴィクトリア朝の文脈を離れた場合、〈あがる〉という言葉に、女性蔑視の含意が存することを認めたくて、*Great Expectations* の終末部分で行われる三つの結婚を見てみれば、やはりこの作品自体が、一面では男性を中心としたプロットの展開に依存していることがわかる。男性の視点から見れば、彼女たちは小説の結末部分に幸福な要素を加える。しかし、女性の視点から見れば、彼女たちは男性の作った双六板の上の駒に過ぎない。ディケンズも（他の多くの男性と同様）このような観点に甘んじていると言えるかもしれない。しかし、本当にそうであろうか。

第一のグループ、つまり〈つぶれる〉パターンを持つ女性群は、むしろこの作品を女性の悲哀を語る物語として特徴づけているように思われるのである。悲哀は、猛り狂う彼女たちの情念の嵐がついに止むところからくる。ディケンズがそれをどう描いたかを見てみれば、彼の女性観が、上に述べたような単純なものではなかったことがわかる。ハヴィシャムの場合、歪められた人生を悔いる場面（第四十九章）を見る必要がある。涙を流しながらピップの足元にひざまずき、“What have I done!” (377) と言って嘆くハヴィシャムの姿が悲哀をさそう。しかし、小切手の署名の下に“I forgive her”と書くように懇願する姿(377)も、“If you knew all my story ... you would have some compassion for me and a better understanding of me” (378) という言葉も、彼女の歪んだ行き方の犠牲となった者たちへの懺悔の気持ちを表してはいるが、一つ重要なものが抜け落ちている。ハヴィシャム自身を歪めた者（男性）との折り合いである。こうして、永遠に〈あがり〉遅れた女性ハヴィシャムは救われない悲惨な犠牲者として終わるのである。このことは、ハヴィシャムが大火傷を負う鬼気迫る場面によって象徴される。彼女は火に包まれてピップに向かって来る――

I saw her running at me, shrieking, with a whirl of fire blazing all about her ... I got them [coats] off, closed with her, threw them down, and got them over her. ... we were on the ground struggling like desperate enemies ... the closer I covered her, the more wildly she shrieked and tried to free herself.” (380)

この場面が暗示しているのは、男性への復讐という情念が、もはや自己解決する期を失い、炎のように燃え上がった末、(男性を代表するピップによって)無理やり封じこめられるしかないということである。しかし“like desperate enemies”という言葉は何を意味しているのだろうか。ハヴィシャムはいわば永遠の敵である男性に最後のはかない抵抗を試みているのだろうか。ここで、永遠に男性を敵とするということは、男性が女性に求めている理想像を拒否することではないのか。ヴィクトリア朝の中流社会が女性に求めていた規範は、結婚によって、主婦の座を占め、夫には服従、家庭外の社会的活動はご法度というものであり、大部分の女性はそれに従ったわけであるが、純粹に女性の側から見れば、これは真の幸福とはいえなかった。ハヴィシャムの歪んだ姿が象徴しているのは、そのことだったのではなからうか。しかし、最後まで拒否したこの女性は悲劇のうちに敗北する。

ジョー夫人は、ハヴィシャムに反して、結婚の道を選ぶのだが、それを呪う女性として描かれていたことはすでにふれた。彼女の情念の嵐が静められる時はどうであろうか。病床の彼女のもとに、襲撃の犯人オーリックが呼び出された時の反応は注目に値する。意外にも、彼女は、彼とせひ仲よくなりたいという気持ちを表す。彼女の態度には、子供が厳格な先生に対する時のように、相手の機嫌をとるような様子が見られる(117)。これは、本心から襲撃者を許す態度とは言えない。しかし、暴力によっていとも簡単に打ち倒された時、襲撃者(男性の腕力を代表する)の機嫌を取るような態度しかできないことによって暗示されているのは、女性としての決定的な弱さである。ここにおいてはジョーも彼女の側にはいない。なぜなら、彼女は、前のごとくジョーを使ってオーリックに復讐を遂げてもよいのにそうしないからである。死の直前に、ジョーを枕元に呼んで“Pardon”

とつぶやく場面の悲哀を特徴づけるのは、ジョーとピップに対する懺悔の気持ちが、死を前にした半身不随の状態からくるといふ点である。悔い改めた女性としての発展の可能性を与えられず、切り捨てられるだけなのである。女性の可能性に対する軽侮であろうか。Gissing は、ジョー夫人のひどい振る舞いの原因を、この種の女性の“nature of animals”に帰した後に、彼女が受ける“punishment”は半殺しの打撃を受けて二度と立ち上がれないようになることだ、と言っている。彼女が回復しても、またもとのようになる可能性があるからである(168-9)。一人の女性の性質が、改善されることよりも、むしろ切り捨てられて、本質的に望ましい他者(ピディー)によって入れ替えられることを、ディケンズは望んでいるように思われるが、このような運命論的な女性観は、切り捨てられる者に悲哀感を生む。この悲哀は、ドラムルとの結婚において打ちひしがれたエステラにも垂れ込める。“the Spider, doggedly watching Estella, outwatched many brighter insects, and would often uncoil himself and drop at the right nick of time”(295)という引用に見られる、蜘蛛が獲物に飛び掛かるというイメージは、高慢な美女としてのエステラの面目を打ち壊す。そして、最終章の出会いにおいて、ピップは“I saw no shadow of parting from her”(460)とは言うのだが、にわか仕立てのハッピー・エンドをほのめかすこの章には⁸、荒れた庭園に垂れ込める霧とともに説明し難い鬱屈した雰囲気まとわりつく。(エステラの“the saddened and softened light of the once proud eyes”にもそれが示されている[458])。ここで読者はもう一人の女性を思い出す。エステラの実の母、モリーである。この母子はついに会うこともなく物語は幕切れとなる。そして、エステラのもう一人の母—養母ハヴィシャムに救いがなかったように、モリーにも救いは訪れない。読者の記憶の中では、ジャガースの家政婦として、強烈な情念を胸に秘めながら、オドオドと日々を暮らしている姿だけが続き、あとはブツリと、途切れているのである。

本稿のねらいは、女性の悲劇の物語として *Great Expectations* を見るために女性登場人物たちの在り方を調べることであった。たとえ表面では、伝統的な女性像が、称賛すべきものとして示されていても、そして作者ディケンズが偏見に歪められてそれを唱導しているように見えても、他面、この作家の多様な人物創造の才能には、そのような安泰な理想像から遠く離れた女性たちの姿をも悲哀の目—蔑視の目ではない—で見る視点が、残されていたのではなかろうか。そうでなければ、ハヴィシャムたちのように強烈でしかも悲愴なところのある人物の創造はできなかったであろう。Kate Dickens の“my father did not understand women”という証言(Storey100)をはじめ、ディケンズの女性蔑視については、誇張されている面が強いように思われる⁹。Michael Slater (301 ff) が議論しているように、ディケンズの女性観は、ヴィクトリア朝という時代に典型的なものだったかもしれないが、彼が創造した様々な女性登場人物をみれば、その多様性に驚くしかない。〈つぶれる〉女性たちに対して、ディケンズの理想を表わして幸福に〈あがって〉しまう女性たちは何と平板で影が薄いのだろう。そしてピップは、結局、〈あがる〉女性の相手をする事ができないばかりでなく、〈つぶれる〉女性たちに対し、一度も憎しみを見せなかった。姉の虐待を耐え忍び、姉の死にあたっては襲撃者への復讐を誓う。エステラの侮辱はピップの恋慕を募らせるばかりであったし、彼を男性全般への復讐の第一の標的に選んだハヴィシャムに対しても、その経歴を知って同情することはあっても、敵意をもつことはない(炎に包まれた老女を組み伏せる場面でさえそうである)。モリーは、ピップの恐れをかきたてはするが、憎しみの対象ではない。主人公ピップの男性に重なるディケンズの女性観が、決して、男性的偏見だけにとらわれていたものでない事は理解できると思われる。そのいう意味で、この作品を女性の悲哀の物語として見る読み方は十分可能であろう。

注

1. John Forster は、この作品の概要を述べるにあたって、ほとんど男性登場人物しか言及していない (Bk. 9, Chap. 3)。その他、代表的な論文はピップの立場を中心に考察したものが大部分である。Julian Moynahan, "The Hero's Guilt: The Case of Great Expectations," in *Essays in Criticism* 10 (1960); G. Robert Stange, "Expectations Well Lost" in *The Dickens Critics*, ed. by George H. Ford and Lauriat Lane, JR (Ithaca, New York: Cornell UP, 1961) など。
2. この問題はそれ自体、大きな社会的課題であり、本稿では検討することができない。"the belief that only marriage and motherhood fulfilled women's biological, social, and divinely appointed destiny" (Mitchell 724) というコンパクトな要約は、ヴィクトリア朝 (特に前期・中期) 社会の女性観の大筋の前提としてよいと考えられる。
3. "It gratifies her immensely to have married the softest-hearted man that ever lived, and also that he happens to be physically one of the strongest; the joy of tramping upon him. . . . It delights her, too, that she has a little brother, a mere baby still, whom she can ill-use at her leisure, remembering always that every harshness to the child is felt still worse by the big good fellow, her husband." (Gissing 168)。ジョーの肉体的な強さについては、オーリックとの喧嘩の場面で証明される (108)。
4. オーリックのジョー夫人襲撃はこの物語の矛盾を救っている。ピップは (ジョーと同様) 姉にあれだけ虐待されても、反抗のそぶりも見せないが、反抗は、成長の過程で必ず通らねばならないはずである。しかしピップが成人に達するはるか以前に、襲撃事件が起こって反抗は無意味となり、この問題に決着がつく。
5. Angus Wilson によれば、ディケンズの女性観が進歩したことをエステラは示しており、他人の支配への彼女の抵抗には、"a recognition of a woman as an individual having her own demands on life"が見られる、と言う (271)。しかし、不幸になることが分かっているながらドラムルと結婚することは "her own demands on life" とは言えまい。
6. ジョー夫人が倒れた後、ピップが紳士となるために村を離れる前夜、二階より見おろしたピップの目に、ジョーのパイプに火をつけるビディの姿が映る。こんな夜更けに煙草を吸うジョーを見て、慰めが欲しいのだろうと、ピップは思う (137)。また、文盲のジョーは、後にビディに字を習うという事実に注意したい (440)。
7. Gissing は、Mrs Snagsby が家庭の平和を破壊する悪者であるのに罰されないのは、Bleak House 執筆の時期までに、ディケンズが因果応報の観念から脱却するほど成長した証拠だといっているが、本稿の趣旨は、これに対する大きな反論をなす。
8. エステラとピップは再会はあるが、別離の示唆を残して終わる、というのが最初意図された結末であったが、ディケンズは、校正刷りの段階で、友人の Bulwer-Lytton の助言を受け入れて、結末を今見る様な形に変更した。この事情および、採用されなかった結末については、Appendix to *Great Expectations* (Oxford 版) を参照。
9. Gissing は、ディケンズについて、彼は男性のために書いたのであり、女性がディケンズを "something like a personal enemy, a confirmed libeller of all who speak the feminine tongue" と見なしても驚くに当たらない、と認めたうえで、彼が風刺精神をこめて描いた多くの愚劣・滑稽な女性の人物描写に注意を促している (156)。

引用文献

- Dickens, Charles. *Great Expectations*. Oxford Illustrated Dickens (Oxford: Oxford UP, 1953).
 Forster, John. *Life of Charles Dickens*. London: Chapman & Hall, 1872.
 Gissing, George. *Charles Dickens*. 1924. Port Washington, New York: Kennikat Press, 1966.
 Mitchell, Sally, ed. *Victorian Britain: An Encyclopedia*. Garland Reference Library of Social Science. New York: Garland, 1988.
 Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: J. M. Dent & Sons, 1983.

Storey, Gladys. *Dickens and Daughter*. London: Frederick Muller, 1939.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin, 1972.

(平成4年9月28日受理)

(平成4年12月28日発行)

